

みめぐみの

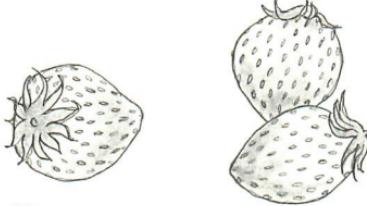
第53部



禮
呈

みめぐみの

第53部



四

大谷光道著

目次

近くて遠い?『正信偈』(四)	2
「五濁惡時」つて?	3
『阿弥陀經』に	5
赤信号	7
では	9
「答」と「応」	12
それで	14
嬉しいお知らせ	16
廟堂建立	22
お墓と寺	18
吉報「その二」	24
親鸞聖人と同じところに	25
代々、造る楽しみ	28
寺務所からのお知らせ	31
あとがき	

近くて遠い？『正信偈』（四）

五濁惡時群生海

五濁惡時群生海
応信如來如實言

五濁惡時の群生海、

まさ
応に如來如實の言を信ずべし。

五濁惡時の世の一切衆生は、まさに、お釈迦様の眞実のお言葉を信じるべきである。

五濁惡時＝五濁の盛んな末世の時代

群生海＝一切衆生のことと、海のようにはてしなく広がっていること

如來＝釈迦如來



「五濁惡時」つて？

末世になると世の中が汚れ濁つてくるというのは、仏教の時代観ですが、今の時代はどう考えてみても、あちこち見渡してみるとまでもなく、全く「濁つた世」としか言いようがありませんね。

五濁というのは、次の五つの濁りのことです。

- 1、劫濁（飢饉・疫病・天災・戦争などが起こる）
- 2、見濁（誤った思想や見解がはびこる）
- 3、煩惱濁（人を迷わす煩惱がはびこる）

4、衆生濁（衆生の心身が衰え資質が低下する）

5、命濁（寿命が短くなつていく）

このうち1から4までは、私たちの身の回りを見るとき、ただただうなずかざるを得ないことばかりだと思います。しかし、5だけが実感と合わないのではないか。どうか。

特に日本は長寿国と言われ、高齢者の割合がどんどん増え、平均寿命も少しずつ伸びていくという有様です。この現象の一つの大きな要因は医学の進歩によるものでしよう。これに対し、昔は「人生五十年」と言つたり、赤ちゃんや子供の死亡率が高かつたことを思えば、時代とともに寿命が短くなつていくというこの命濁だけは、当てはまらないように思えます。

しかし本当に私たちの寿命は伸びていつているのでしょうか。意味や生き甲斐のある生き方について考えるとき、本当の意味での寿命は時代とともに短くなつていついるのではないでしようか。

『阿弥陀經』に

お釈迦様は、『阿弥陀經』——『淨土三部經』（淨土真宗の中心となる三つのお經）の一つ——で、ご説法を終わられるにあたって、智慧第一の弟子として知られた舍利弗尊者しゃりほつそんじやに、

舍利弗よ。私が諸仏の不思議な功德を褒め讃えているように、諸仏たちもまた私の不思議な功德を褒め讃えて、「釈迦牟尼仏（お釈迦様）は、はなはだ難しく世にもまれなことをなし、よくこの娑婆世界の劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の五濁の悪世界にあって、無上の仮果を覺り、諸々の衆生のために、一切の世界で最高の難信の法を説かれたのである」と言われるるのである。

と、さらによつた、

舍利弗よ、よく知るがよい。私は五濁惡世のこの世において、このような難事をなしとげて覺りを開き、一切世間の人々のために、この難信の法を説いたのである。まことに難事のことであつた。

と、説き聞かせておられます。

このように「世の中が次第に悪くなつていく、そんな中でこの教えを説くのは大変なことだつた」と、五濁という世の中の眞の姿を見破つた上で、法を説くのは至難のことであつたと述懐され、そして「五濁の世であり至難であつても、いや、五濁であり至難であればこそ、どうしても成し遂げねばならない」、それがお釈迦様の堅いお心であつたと知ることができます。

赤信号

身近な現象を見ながら、五濁について考えてみましょう。

「赤信号、みんなで渡れば怖くない」とは、「一人でやつたら叱られるような悪いことでも、多人数でやれば取り締まる側の手が追い付かないので、そのままやむやにできてしまう」とか、「悪いことでも、多人数でやつたことは正しく見えてしまう」ということです。「悪いことでも数の力で正当化できるのだ」と言いたいときに使うたとえです。

そしてまた、——これは悪いことというのではありませんが——「僕にもゲーム買って！　スマホ買って！　だって、みんな買ってもらっているもの」という子供のおねだりとか、何かで叱られたとき、「だって、みんなやつてるもの」なども、数を頼みにしようとする意味で、同類でしょう。このおねだりなどは、さらに「持っていないと仲間外れになる」ということにもな

つっていくと、数はもはや一つの勢力、力です。

この図式は大人の世界も同じことで、「皆のする通りにしていればいい」が、しだいに人間関係の柵（しがらみ）ともあいまつて「皆の通りにしないと生きていけない。そうせざるを得ない」と発展していきます。人間は集団で生きる動物なので、「わかつていても……」と、どうしてもやむを得ない面も出てきます。数と同じく、量の多さや力の強さも同じで、「寄らば大樹の陰」「長い物には巻かれろ」などと、人々を巻き込んでいきます。「格差社会」云々が新聞等で取り沙汰されますが、大きいもの強いものは、さらに大きく強く増殖していきます。重い星の最終段階であるブラックホールは、物質を何もかも巻き込み、自らの重みでさらに物を圧縮し、光までもそこから出られないように閉じ込めてしまうので、外からは全く見えなくなってしまうのだそうです。このブラックホールを思い起こさせるような現象に、私たちはいやでもいたるところで接してしまいます。私たち人間は集団で生活する動物であるこ

とに加え、良いほうへよりは悪いほうに染まりやすいものであることは、いつの時代も変わらないのでしょうか。「世の中」と言つてもそれを作つてるのは、取りも直さず人間そのものなのですが、その人間の集まり（世の中）が悪いほうに流れる現象のことを、お釈迦様は「五濁の世」と仰つたのでしよう。

昨今は、飽くなき欲望追求が正義、さらに美德となつてているほどで、人の煩惱を野放しにしている時代です。お釈迦様の頃の世の中よりもはるかにひどい、五濁の世です。

では

では、この五濁の世に私たちは一体何をすべきなのでしょうか。そもそも、世の中の汚れ、濁りは、私たちが一人でもがいても、どうすることもできない問題です。それでも正義感に燃えて、この現象を阻止すべく立ち上がるべ

きかも知れません。しかしその前に、そもそも私たちの求めていく信仰の世界は、世の中云々の前にまず何と言つても、個人の悩みの解決、救いが課題です。たいへん気の遠くなるような話ですが、信心の人、念佛の人が一人でも増えていくことで、世の中という私たちの環境が少しづつでも良くなつていくという関係にあります。

親鸞聖人

親鸞は父母の孝養のためとて、一邊にても念佛申したこと、いまだ候はず

と仰せになつたと『歎異抄』に伝えられています（『第十一部』に詳説）。

これは、「亡き父母を成仏させようとして念佛しても、詮のないこと。そもそも、助ける力のない己」が人を助けられる道理がないのだ。それよります、

自分が浄土に往生して成仏せよ。そうすれば、父母と言わず、兄弟と言わず、あらゆる衆生（生きとし生けるもの）を思い通りに助けることが出来るのだ」という趣旨です。

これと同じく、浄土真宗は、一にも二にも「まず、信心を獲よ」ということで、「世直しのためにはまず自分の信心から。急がば回れ」です。

そして、世の中が乱れれば乱れるほど、つまり墮落すればするほど——人々の資質が落ちれば落ちるほど（衆生濁）——、難解な教えや苦しい修行は敬遠されていく反面、信心と念佛だけで救われる教えなら受け入れてもらえるはずです。何としても私たちは、この教えを大切にしていかねばなりません。

「答」と「応」

つぎに、「応信如来如実言」の「応」に移りましょう。

「応」は、「まさに……すべし」で、「当然……すべきだ」「……するのがもつともだ」「するのが一番よい」という意味で、「……すること」が強く望まれていることを表す言葉です。つまり、「五濁惡世の衆生はお釈迦様の真実のお言葉——阿弥陀様の本願——を信じなさい」という意味です。

私たちは、「こたえる」というとき、たいてい「答」の字を使います。

時々「これでよかつたかな。応かな」と気になり、「応」に書き直ます。気になるので辞書を引いてみました。

「答」は、「出された問題に対する解答」という意味で、「応」は、「相手の期待・要望や歓迎を受け入れて、それに十分に見合うような行動をとる」という意味合いがあります。つまり、「答」にはYESとNOのどちらもあ

るのですが、「応」にはYESしかありません。
『漢字源』（漢和辞典）には、興味ある説明があつたので、ご紹介します
よう。

應（応の本字）の上部は「广（おおい・屋根）+人+隹（とり（鳥））」
から成り、人が胸に鳥を受け止めたさま。應はこれに心を加えた字で、
心でしつかりと受け止めること。先方から来るものを受け止める意を含
む。

「（如來のお言葉を）心でしつかりと受け止める」ということが、まさに
親鸞聖人の仰りたかったことであると、いただかれます。如來の仰せを合点
して「かしこまりました」と受け入れることが「応」ということで、私たち
の口から「ひと声の念佛」という「こたえ」が出てくるのです。

それで……

親鸞聖人は、今日のところをまとめて、次のように『御和讃』にもお示しです。

五濁惡時惡世界 濁惡邪見じやけんの衆生には

弥陀の名号あたへてぞ 恒沙こうじやの諸仏すすめたる

『『淨土和讃』』

濁惡＝五濁と十惡（人間の基本的な十の罪惡）。五濁の世の中で罪惡が満ちていること

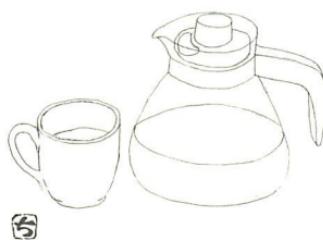
邪見＝よこしまな見方。正しくない見解

恒沙の諸仏＝ガンジス河の砂の数ほどの仏。数限りない仏様

五濁惡時の惡世界で十惡を行い、正しいものの見方ができない衆生には、

「弥陀の名号（南無阿弥陀仏）を与えることによる救いを除いて他に、迷いの苦しみから離れる方法はない」と諸仏方は勧めておられる。

こんな五濁の世だからこそ、「煩惱にまみれた凡夫でも念佛を称える信心一つで救われるのだ」というまことに易しい教えが尊く、念佛の教えだけは踏み留まっていかなければならぬのだと思ひます。



嬉しいお知らせ

ご承知のように、私たちは平成十七年十一月、今までの大谷家のお内仏（仏間）の阿弥陀様と親鸞聖人御木像にお伴をして、ここ嵯峨に移りました。それ以後、二十三年に本堂が出来るまでは、仮御堂として寺務所の二階を使つてきました。

六百坪弱という広さは、広いような、狭いような……。しかし、建蔽率けんぺいりつ二〇%というこの近辺の規制を考えると、やはり狭いとしか言えません。本堂を少しでも広くするため、借地の可能性をも含めて、何とか境内地の拡張が

出来ないものか、折に触れて関係方面と折衝も試みてきたのですが、どうしてもこの願いは実現できずにきました。それで、その解決策として本堂は地階とすることとし、設計・建築が進み、完成し落慶法要も済ませました。

ところが昨年春ごろ、「お隣の地主さんから土地の利用方法についてご相談を受けています。さしあたり測量しなければならないので、お隣としてご協力をお願いしたいのです」と、不動産業者が訪ねてきました。そしてさらには、「地主さんのお考えとしては、売却も選択肢の一つで、『以前から本願寺さんがここを欲しがつておられるから、是非ご挨拶してくるように』と言わっています」と。これには、わが耳を疑つたものです。「以前からどうしても話を聞いてくださらなかつた方がどうされたのだろうか」と。まあしかし、お隣のご事情を云々する立場でもありません。

それで、本願寺の役員その他関係者と相談したところ、「隣の土地は買うのが常識。もし他所の物になつては、孫末代、未来永劫、後悔することにな



作業される台下

る」と、衆議一決しました。その後交渉を重ね、昨年暮れ、西隣の約千二百坪の土地はわが本願寺の所有となりました。これによつて、本願寺の敷地は一挙に今までの三倍（約一八〇〇坪）になつたのです。

以上、まず以て、お知らせいたします。

廟堂建立

私たちの当初の計画図に載つてい
る、山門、六角堂、土壠などは未着
手です。これらはいづれも大切です

が、やはり優先順位をつけて事に当たらねばならず、六角堂からということになるでしょう。この六角堂は、宗祖親鸞聖人の御廟ごびょう（お墓）のつもりで、境内地の西北の隅に建てることになっています。しかし、どう考えてもそこには位置的な問題があり、それを解決できず行き詰まってしまいました。その時点では広さの問題は止むを得ないとしても、動線という問題がありました。

皆さんにお参りしていただくのに、御廟への行き帰りの途中の景色や通り道の不便さ窮屈さなどです。かと言つて、狭い境内地の中では、他に御廟を建てる場所は見つからないという有様です。ところが今回、この広い土地を得たことで、御廟としての機能やそこへの動線はもちろん、杉の木立や竹の生い茂る清々しさからも、最高の佇たたずまいを存分に満喫できる空間を造ることが可能になつたのです。眼前に広がる嵐山と小倉山、四季折々の草花を愛でながらの散策、珍しい小鳥のさえずりを耳に、心地よい風に吹かれ語り合えるひとときなど、夢はどんどん広がるばかりです。

当初の計画での六角堂のイメージは、覚如上人御作『御伝鈔』最後の「廟堂建立」の段（下巻第七段）にある廟堂の絵から来ています。

文永九年（一二七二）冬のころ、東山西の麓、鳥部野とりべのの北、大谷の墳墓をあらためて、おなじき麓よりなほ西、吉水の北の辺に遺骨を掘り渡して仏閣を立（建）て、影像を安ず。このときに当りて、聖人（親鸞）相伝の宗義いよいよ興こうじ、遺訓ゆいくんますます盛りなること、すこぶる在世の昔に超えたり。すべて門葉國郡もんように充满し、末流処々に遍布して、幾千万といふことをしらず。その稟教ほんぎょうをおもくして、かの報謝ぬきを抽んづる輩、縉素しそ・老少、面々に歩みを運んで年々廟堂に詣す。おほよそ聖人在生のあひだ、奇特これおほしといへども羅縷らるいとまに遑あらず。しかしながらこれを略するところなり。

緇素＝僧侶と俗人。「緇」は黒色、黒衣を着る人（僧侶）。「素」は白色、白衣を着る人（俗人）

嬉しいお知らせ

『御伝鈔』には、親鸞聖人の御誕生から御修行、法然門下への入門、その後の数々の御事績が仔細に述べられ、そして御入滅、最後がこの廟堂建立となっています。この廟堂建立の段には、「墳墓の場所を変え御遺骨を移動して仏閣を建て、親鸞聖人の御木像を安置した。そして、聖人の教えはますます盛んになり、御在世の頃よりはるかに多くの門徒が全国に満ちあふれ、その数幾千万とも知れない。教えを賜つた聖人への御恩報謝の気持ちを抑え切れない人々が、僧俗、老少を問わず毎年廟堂にお詣りしている『本文意訳』』と述べられていて、これによつて、聖人を慕う人々が聖人の御廟にお参りすることから本願寺が始まつたことを^{つぶさ}具に知ることが出来ます。そしてそこに描かれているのが、六角堂とその中に安置されている聖人の御木像で、つまりこれが本願寺の最初の姿なのです。



ご奉仕の皆さん

お墓と寺

親鸞聖人の御廟（お墓）が覺如上人（本願寺第三世）以降、次第に寺院としての色彩を強めてきたため、一般の目からは、本願寺と言えば「寺」と映つてゐるでしよう。聖人を追慕する心情からは、「聖人のみ教えを伝えるこそ、聖人のお心に沿うのだ」との思いが生まれるのは当然であり、聖人を追慕する御廟とそのみ教えを広める本願寺は一つのものとして今日に至りました。

しかし、歴史に翻弄ほんろうされたことの多かつた本願寺は、転々とその位置を変え、御廟も時代とともに場所を変えました。そしてまた、両者が同じ場所にあつたことも、別の場所にあつたこともあります。たとえば、教如上人（第十二世）が家康公に土地をいただき下京の烏丸七条に（東）本願寺を作られた後、はじめは御廟は本願寺の中にあつたのですが、琢如上人（第十四世）の時、東山の円山に移転しました。

私たちは、嵯峨に移つてから今日まで御廟を持たずに来て、「御廟がなければ本願寺ではない」と、このことが気になつていきました。しかしようやく今、寺院としての形と機能を整えることが出来、そして今回の境内地拡張という好機を得て、御廟を持ちたいという悲願を実現させられる段階となつたのです。

吉報「その二」 親鸞聖人と同じところに

ここで、もう一つの大切なお知らせがあります。この御廟は、本願寺の濫觴しょう（始まり）の象徴・「御廟＝六角堂」という、ただの形だけのものではなく、本願寺の歴代が代々伝えて来てくださった宗祖親鸞聖人と御歴代の御分骨をお納めします。

そして、「親鸞聖人や御歴代と同じところに落ち着きたい」と願われるご門徒の聖人追慕の心情から、古来、ご遺骨の一部を御廟のそばに納める習わしがあります。この度も是非その施設を作つて、皆さんの満足を得られるようになしたいと考えています。

また、新境内には僧侶・門徒の研修・宿泊施設、そして代々大谷家に伝わる東本願寺宝物を展示・保存する施設も計画しております。

読者の皆様で、新境内について良いアイディアを思いつかれた方は、是非

お聞かせください。

代々、造る楽しみ

この土地は、前の地主さんが長期間ほとんど手を入れられていないので、そこからの着手となります。このことを心配して「是非、ご奉仕をしたい」と願い出てくださった方々が、中には何日も寺務所に泊まり込んで、枯れ枝や倒木を集めるなど、汗を流してくださっているのは、まことに尊いことです。そして、皆さん口をそろえて次のように言つてくださいます。

「これだけ時間を忘れて作業するというのは、はじめての経験でございました。学生時代よく肉体労働系のアルバイトをした際には、時間ばかり気にしてましたので、その事と比べて、自分自身驚いておりました。」「……正に森林整備の果てない作務を苦に思う自分がいたが、翌日にな

ると繰返し行う作務の裏には、一心に専修する行と相通するのではと思うようになり、元気が沸いて作務するように変化していった。」

やつてみるまでは何となく今一つ乗り気がしなかつたものが、やつてみてはじめて、時を忘れて……、元気になつて……と。「やつてみなければわからぬ」のは何事にも通じることですが、「奉仕」もその一つだと、私も教わることになりました。

皆さんが今年の闡如會（春の法要）にお越しのころには、自由に散策され、十分に将来のイメージを描く楽しみを味わっていただけるような景色になつているはずです。

寺院は、私たちそれぞれの祖父母から父母、そしてまた子、孫へと受け継がれていき、長い年月をかけて少しづつ整備されていくもので、数知れぬ多くの人々の心が形になつて残つていきます。ご先祖が大切にした教えと同様、



境内に漂う梅の香（台下ご撮影）

寺院も何代もかけて整備していく、その楽しさを大切に味わっていきたいものです。西洋の大教会も何百年もの間ずっと建築中というのが当たり前であることから、これは洋の東西を問わないものなのでしょう。

寺務所からのお知らせ

平成二十七年 春の法要『闡如會』勤修

四月十日から十三日まで

【法要時間】 逮夜・14時、晨朝・7時、日中・10時30分

十日 14時 釈尊及び親鸞上人御誕生会

十一日 7時 立教開宗記念日法要

10時30分 徳川家康公四百回忌法要

十一日逮夜より十二日日中 酬徳會

十二日逮夜より十三日日中 前住闡如上人御祥月命日法要

(十二日逮夜は大谷楽苑の演奏に引続き勤行)

【おかげそりのご案内】

毎逮夜後（十三日のみ日中後）に帰敬式を行います。

有縁の皆様とお誘い合わせの上、御参加下さい（要予約）。

闡如會記念・春の宝物展『徳川家康と東本願寺』
同時展示『大谷家の雛人形』

東本願寺は、徳川家康公と本願寺十二世教如上人との盟友とも言える信頼関係から生まれました。

今を遡ること四百年、豊臣秀吉により本願寺法主の座を奪われた教如上人に旧東本願寺寺地を与え東西分立を強く勧めたのが、他ならぬ家康公なのです。今年は家康公の四百回忌に当たり、当山でも古式に則り家康公の四百回忌を勤修いたしますが、それを記念して、家康公ゆかりの品々を中心とした宝物を展示公開いたします。

関ヶ原合戦前夜、下野小山の陣中において教如上人が家康公より拝領した馬具、軍扇や貴重な書簡等を初公開。

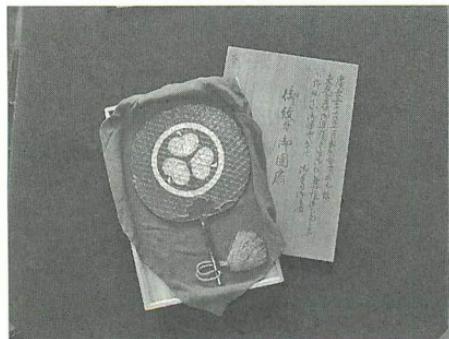
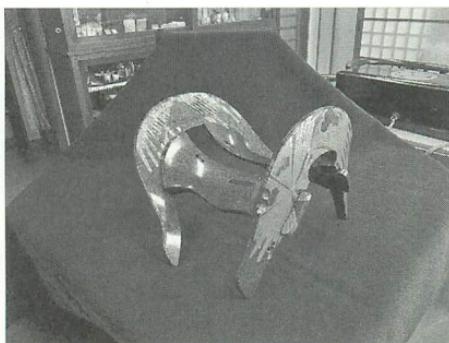
四月三日～十三日 午前十時三十分～午後四時（十三日は午後二時まで）

※4月11、12、13日は晨朝勤行御参詣の皆様に限り、早朝開場いたします。

《展示予定・本堂1F・通期》

櫻欄蒔絵鞍・櫻欄蒔絵鏡（慶長五年教如上人が家康公より賜る）

鏡面六字名号（伝顯如上人御染筆）、徳川家康公御消息、豊臣秀吉公御悔状
東照宮神像（東叡山毘沙門堂開基公海僧正筆）、成然上人消息など



あとがき

みめぐみの刊行委員会

今年も春の法要「闡如會」の季節がやつて来ました。

「近くて遠い？『正信偈』」は四回目です。光道台下は、ブラックホールのような「五濁惡時」の世の中に取り込まれず、念佛の教えだけは「踏みとどまつていかなければ」と説いておられます。御親教集『みめぐみの』は心の依り処ですが、そこに留まらず本願寺に足を運び、直にお念佛の教えに触れて行きたいものです。

後編は、台下からの嬉しいお知らせです。本願寺では嵯峨の境内の隣接地を購入。光道台下が文字通り先頭に立つて、「皆さんが喜んで下さるよう」にと整備作業に取り組んで下さっています。また、御廟の建設計画、皆さんの納骨堂、研修施設、宝物の展示収蔵施設の建設計画と夢が広がる御発表も頂きました。

皆様からのご感想、ご質問をお待ちしております。どしどしお寄せ下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円

○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊＝210円、7～9冊＝290円

○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの 第53部

2015年3月5日 印刷
2015年3月10日 発行

定価 200円

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社

